



The 80th
**TOKYO
YUSHUN**

[レースレビュー]

桁違いの脚色でゴール直前大逆転 第80代ダービー馬が誕生した瞬間

「混戦」という二文字がひとつのキーワードだった今年の牡馬クラシック路線。しかし、皐月賞以降のレースでダービーへ向けた勢力図は徐々に固まっていき、皐月賞に出走しなかったキズナが、ダービーに的を絞ったローテーションを選択して見事栄冠を手にしたのだった。

石田敏徳 = 文
text by Toshinori Ishida



スタートで大きく出遅れた馬はいなかったが、コーディーノはややタイミングが合わず、いつもよりも位置取りは後方になった

Y.Hamano



素質の高さを評価されていたコーディーノ。それに違わぬ快進撃を続けるも、レースを重ねる毎に折り合いに難しさを見せた

K.Yamamoto



エピファネイアも血統背景から期待の大きい1頭だったが、折り合い面に課題が散見されるようになってきた

Y.Hamano



2歳王者ロゴタイプは年明けのトライアルと皐月賞を連勝。同じような臨戦過程のナリタブライアンを彷彿とさせた

I.Terashima



弥生賞で差のない5着に敗れたキズナは、皐月賞を回避し、ダービー一本に絞るローテーションを選択した

第80回日本ダービー戦前の様相は 皐月賞上位組対別路線組の雄

K.Ishiyama



先手を取ったのは大方の予想通りアポロソニック。しかしサムソンズブライドが外から体を並べ、2頭が後続を引き離しにかかる



在な脚質と非凡な脚力を改めて印象付けた2歳王者に、道中の折り合いを欠きながら僅差の2、3着に食い下がったエピファネイア、コーディーノを加えた皐月賞上位馬という軸がここに確立される。これに対抗する存在として急浮上してきた別路線組の雄がキズナだった。5着に敗れた弥生賞の後、中2週の間隔で臨んだ毎日杯を豪快に差し切ると、皐月賞参戦を見送って駒を進めた京都新聞杯で

「府中に競馬場が誕生し、80年という節目を迎えるにあたり、競馬場を育んだ府中の歴史・文化を競馬ファンの皆様へもご紹介したく、くらやみ祭に関連する祭具を展示いたします」
目黒から移転してきた東京競馬場で、初めてのダービー(第3回)が行われたのは1934年。以降、80年にわたって競馬場が府中の町とともに歴史を育んできたように、ダービーも日本の競馬と一体

「うわ、今日は盛り上がりすぎてんあ」釣られて振り向けば、スタンドはすでにギッシリ満員。スタンド前の立見スペースだって相当な混雑ぶりだ。ダービーデーの競馬場が朝から特別な熱気に包まれるのは毎年のことだが、今年のそれはとりわけ濃密に感じられる。
この日の入場人員は最終的に13万9806人を記録。80回目という節目を迎えるレースを盛り上げるべく、大々的に展開されてきたプロモーションは狙い通りの効果をあげたようだ。実際、当日の場内では初めて競馬場にやって来たと思しき人たちがずいぶん見かけた。私みたいな「すれっからし」には微笑ましく聞こえる会話を耳にすると思わず、「ダービーへようこそ」と声をかけたくなる。
節目といえば、場内に出展されていた様々なブースのひとつ、府中の町の春の風物詩として知られる「くらやみ祭」の祭具にはこんな解説が記されていた。

ダービーデーのオープニングを飾る第1レースが終わった直後、私の前で観戦していた2人連れの若い男性がスタンドを見上げ、こんな声をあげた。
「うわ、今日は盛り上がりすぎてんあ」釣られて振り向けば、スタンドはすでにギッシリ満員。スタンド前の立見スペースだって相当な混雑ぶりだ。ダービーデーの競馬場が朝から特別な熱気に包まれるのは毎年のことだが、今年のそれはとりわけ濃密に感じられる。

も圧巻の末脚を繰り出して快勝。父のデーパーインパクトを彷彿とさせる爆発力は、相手関係の違いを差し引いても強烈で魅力的と映った。落馬事故によって長期の療養を余儀なくされた佐藤哲三騎手にかわり、新コンビを組んだからの2戦では、もうひとつ噛みあっていたいなかった人馬のコンビネーションもこの2戦では見事に深化。武豊騎手はすっかり、馬を手の内に入れたようだった。

しかし上空を覆っていた厚い雲は見るうちに晴れ渡っていく。3歳初戦のスプリングSを完勝したロゴタイプが、返す刀で皐月賞も快勝したからだ。レコードで決着したハイレベルな激戦で、自

「混戦」模様から急浮上してきた存在
今年のダービーロードは「混戦」という風評のもとで進行してきた。2歳王者のロゴタイプが距離適性も踏まえ、暫定的なチャンピオンと見なされていたこと、次々に出現する新星たちがいずれも確たるインパクトまでは刻めなかったこと、2歳戦を無傷で折り返したラジオNIKKEI杯2歳Sの覇者エピファネイアが、始動戦の弥生賞で4着に敗れたことなどがその理由である。特に、エピファネイアに比肩する存在と目されていたコーディーノ、キズナが、揃って敗退した弥生賞の時点では、混迷の霧は近年稀に見るレベルまで深まったように思えた。

「混戦」模様から急浮上してきた存在
今年のダービーロードは「混戦」という風評のもとで進行してきた。2歳王者のロゴタイプが距離適性も踏まえ、暫定的なチャンピオンと見なされていたこと、次々に出現する新星たちがいずれも確たるインパクトまでは刻めなかったこと、2歳戦を無傷で折り返したラジオNIKKEI杯2歳Sの覇者エピファネイアが、始動戦の弥生賞で4着に敗れたことなどがその理由である。特に、エピファネイアに比肩する存在と目されていたコーディーノ、キズナが、揃って敗退した弥生賞の時点では、混迷の霧は近年稀に見るレベルまで深まったように思えた。

スタミナの消耗戦を尻目に
大外一気に桁違いの末脚を披露
ダービー・ポジションという言葉が過去の遺物と化した今でも、スタートから1コーナーまでの序盤の滑り出しがダービーの重要なポイントであることに変わりはない。先の2頭にエピファネイア、コーディーノを加えた4頭のうち、まずここで出鼻をくじかれたのがコーディーノだった。スタートで躓いたうえ、位置を取



りにいこうとした鞍上の指示に馬が過敏に反応。頭を上げて行き過ぎたが、レースの流れに乗り損ねてしまったのだ。

対して、この日も抜群のスタートを決めたロゴタイプはまずまずスムーズに折り合って4、5番手の好位を確保。エピソードの福永祐一騎手は行き過ぎる馬を懸命にだめながら、中団馬群の内ラチ沿いに腰を落ち着ける。一方、武豊騎手のキズナは後方3、4番手の内で末脚を温存。「ポジションにはこだわらず、馬のリズムを重視してレースを運びました」というコメントが聞こえてくるような序盤の滑り出しだ。

先導役を務めたのはアポロソニックだった。外から勢いよく飛び出してきたサムソンスプライドに手綱を押しつけて押し抵抗、一歩も引かない構えで主導権を取りきった勝浦正樹騎手は定石通り、2コーナーでペースを落とす。ところが向正面の半ば、折り合いを欠いたメイケイペガスターが外から一気に先頭にまで進出した。2番手に控えた勝浦騎手だが、3コーナー過ぎから主導権を奪い返しにかり、これによってペースアップのタイミングが早くなったことが、思えばレースのポイントのひとつだった。

こうして迎えた直線、離れた好位で満を持していたロゴタイプが前を呑み込みにかかると、消耗度が高かった流れに正攻法で挑んだ結果、知らず知らずのうちにスタミナを奪われていたのか、先頭に並びかけたところで伸びあぐねてしまう。そんなロゴタイプにかわって、エピソードが先頭に躍り出たのはゴールの50



3コーナー付近。向正面でメイケイペガスターが動いて先頭に立ち(写真左)、ペースは徐々に速くなっていった

父を彷彿とさせる桁違いの末脚 秋は父が苦杯を嘗めたあの舞台へ

目撃者前あたり。しかしそのときにはもう、誰もが数秒後に訪れる逆転の結末を予見していた。大外から伸びてきたキズナの脚勢はそれぐらい際立っていた。4コーナーから押し上げにかかり、外へ持ち出された直線では進路を塞がれかかる場面もあったが、ピンチを切り抜け、エンジンに火がついてからは桁違いの勢いで加速。エピソードを悠々とかわし、節目のゴールを駆け抜けた。

10年、20年後にも語り継がれる 前途洋々の第80代ダービー馬

万雷の拍手に迎えられて凱旋してきた武豊騎手をはじめとする関係者一行が、表彰式へ移動した後の検量室前では、敗れた騎手たちが敗者の弁を述べていた。「坂が上がったあたりで伸びを欠いてしまった」と距離を敗因にあげたのはロゴタイプのC・デムーロ騎手。一方、3着



直線で外に持ち出したキズナ(写真左から3番目の白帽)だが、前が塞がって行き場をなくすようなシーンも見られた

と咳いて深いため息をついた。同時進行で行われていた表彰式の様子は、検量室内のモニターテレビでも流れていて、武豊騎手の笑顔が画面に映る。彼の視線の先、ファンで埋め尽くされた場内にもきつと、いちはばん、勝ってほしいと願っていた馬の勝利を祝福する人々の笑顔の花が満面に咲いているのだろう。その光景を想像しながら私は、発走の直前にターフビジョンで放映された映像——三冠馬と父仔制覇を果たした馬を中心としたダービーの歴史を紹介したもの——のことを思い出していた。

10年、20年後のダービーでも、同様の映像が放映される可能性は高い。そのとき、今日のレースを目の当たりにした人

たちの脳裏にはどんな記憶が甦るだろう。「武豊がディーブの仔に乗って8年ぶりに勝ったダービーね」と思い出すだろうか。「福永が『あと2完歩』に泣いたダービー」として記憶されている？ いやいや、もっとシンプルに「あのキズナが勝ったダービー」として思い返されるのかもしれない。

様々なドラマと、無限の可能性が内包されているネバー・エンディング・ストーリーに読みふける。ダービーを、競馬を見続けていくとはつまりそういうことだ。秋には凱旋門賞に挑戦する計画が具体化しているキズナ。80回目という節目に相応しい、印象的な年輪を刻んだダービー馬の前途には楽しみが広がる。

第80回 東京優駿(日本ダービー)(GI) | 5.26 東京 晴・良 芝2400m 国産(指定) 18頭

着順	馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム(備差)	単勝(オッズ)	調教師
1	①	キズナ	牡3	57	武豊	2:24.3	2.9①	佐々木晶三(栗東)
2	⑨	エピソード	牡3	57	福永祐一	1/2	6.1③	角居勝彦(栗東)
3	③	アポロソニック	牡3	57	勝浦正樹	1 1/4	61.6⑧	堀井雅広(美浦)
4	⑩	ペプチドアマゾン	牡3	57	藤岡康太	ハナ	109.8⑩	吉村圭司(栗東)
5	⑧	ロゴタイプ	牡3	57	C.デムーロ	ハナ	3.0②	田中剛(美浦)

6着以下テイエイナズマ、ラブリーデイ、タマモベストプレイ、コディーノ、フラムドグワール、メイケイペガスター、レッドレイヴン、ヒラボクディーブ、アクションスター、マイネルホウオウ、クラウンレガード、サムソンスプライド、ミヤジタイガ

K.Ishiyama



多くの活躍馬を送り出してきたオーナーブリーダーのノースヒルズは、悲願のダービー初制覇となった